
チュートリアル

国際学術コミュニケーションと英語学術論文の書き方 —2009年全国大会で行ったチュートリアルの報告・反省—

International Communication and How to Write an Academic Paper in English:
A report and some reflections on a tutorial held at the 2009 Conference of the Japan Society for Socio-Information Studies

キーワード：

学術英語、論文執筆、大学院生の英語教育

Keyword：

Academic English, Academic Writing, English Education for Graduate Students

東京大学 デイビッド C. ビュースト

The University of Tokyo David C. BUIST

要 約

2009年の9月に新潟大学で開催された大会で行われた「英語論文執筆ワークショップ」の報告である。学術英語の主な特徴を論じた後、学術スタイル、代名詞の用法、冠詞、ネーティヴではない人にとって特に難しいとされる3つのテーマを取り上げる。時間が十分なかったので、この3点以外に英語学術論文の執筆者が直面する問題を取り上げられなかったが、本チュートリアルが参考になれば幸いである。

Abstract

This is a report on a tutorial held at the Conference of the Japan Society for Socio-Information Studies held at the University of Niigata in September 2009. The aim of this tutorial was to provide guidance on the writing of academic papers in English. Some of the major features of academic English are discussed, and three specific areas of difficulty for non-native speakers are given special treatment: academic style, pronoun usage, and articles. Time constraints prevented fuller coverage of all the issues faced by non-native speakers when using English for academic purposes, but it is hoped that the guidance offered here will be of some practical use.

1. 背景

近年、学術研究の国際化が更に進み、言語学を専門としない研究者にとっても、言語力が常にとわれるようになってきている。特に重視されるようになってきているのが英語力である。英語が普段に使われる場が非常多く、できる限り大勢の人に理解されるために、英語論文を解読する能力だけではなく、英語で論文を発信する力も要求されるようになった。

こうした背景を受けて、2009年の日本社会情報学会大会で「英語論文執筆ワークショップ」が開催され、講師として参加させていただいた。今まで、東京大学大学院学際情報学府（以下、「学際情報学府」）の博士課程学生を対象に国際学術コミュニケーションと英語学術論文執筆の授業を担当してきたが、今回のワークショップは、大学院生から熟練の研究者まで、参加者の経歴が様々であり、色々な人が自分の英語力を向上させる必要性を感じていることを改めて認識した。

2006年以降、学際情報学府では、大学院生の英語発信力を向上させるための授業を行ってきた。最初は、希望者のみを対象に小規模の選択科目だったが、2009年度からは、本格化に向けて規模を拡大した。既に、博士課程の学生全員が学術英語の授業を履修できる体制を作っており、プレゼンテーションのスキルから論文を書くノウハウまで、国際コミュニケーション能力を備えた将来型の学者を育てようとしている。

一般の日本の大学院生が英語学術論文を自分で執筆できるぐらいに上達するのに相当の時間がかかる。多くの場合に、課程を修了するまでに最終的な目標にまで到達することは困難である。このような状況ではあるが、学際情報学府では授業を通して、英語論文の執筆者に何が求められているのか、自分で書けるようになるのにどうすれば良いのか、少なくとも何らかの道標を示そうとしている。また、言語力を向上させるのに実践や試行錯誤が欠かせないことを踏まえ、実際に小論文を

書いたり、英語でプレゼンテーションを行うなど、授業でのエクササイズや宿題を通して学生に英語コミュニケーションを実践する場を提供している。

大会で行ったチュートリアルは、このような実習は行われず、私が一方的に話したり、参加者の質問に答えたりして、レクチャーに近い形になった。時間が制限されたこともあり、英語学術論文の書き方を概括しか出来なかったが、大会でのチュートリアルの内容を報告させていただく。また、最後には、私自身の感想や反省のコメントを付け加える。

2. 学術英語の特徴

学術論文で使われる「学術英語」(academic English)はそれなりの特徴をもっており、それ以外の場面で使われる英語と区別できる。特に対照的なのは日常会話で使われる「会話英語」(conversational English)である。英会話のレッスンなどで習った表現をそのまま学術論文に持ち込めば学術論文に相応しい語調にはならない。だから、「学術英語」の特徴を意識するのが最初に論文の執筆者に要求されることである。その特徴を概論の形で説明するために、4つの点を取り上げる。

(1) Formality 語調の硬さ

俗語を用いたり、省略形を使ったり、文法を厳密に適用しないなど、書くスタイルを十分硬くしないと、学術論文としては受け入れられない。日常会話で普通に使われても、学術的な語調に相応しくないと論文でほとんど使われない単語や表現がある（その具体例を後ほど紹介する）。また、英語の語彙に、「二重構造」のようなものがあることを意識しなければならない。意味に大きな差がないのに、2つの単語・表現の間に、片方が学術的で硬いものに対して、もう一方が会話的でくだけたという関係が存在する。その二重構造の根源は英語の歴史にある。といのは、元々ゲルマ

ン系の言語である英語は、中世時代以降、ラテン系の言語から多大な影響を受けるようになっていく。その影響は1066年以降大陸から侵入してきたノルマン人の支配階級やラテン語の文化を守ってきた聖職者を通してイングランド社会の底辺まで浸透してきた。こうして社会の上層から普及したラテン系の言葉は、「高級」、「正式」、「硬い」などの特性をもつようになり、学術の文章に最も相応しいとされてきた。だから、学術的な雰囲気醸し出すためには、ラテン系の語彙をたくさん使うのが1つの工夫である。

(2) Clarity 明快さ

学術論文にもう1つ求められるのは、意味をなるべくはっきりさせて、曖昧で解釈しにくいところがないように心がけることである。どのようなコミュニケーションもそうだとされるかもしれないが、明快さの条件は場によって違う。親しい相手の間に行われる日常会話では、いつもの共通理解の割合が高いことがあり、直接言わなくても意味が十分通じる。すなわち、日常会話は、文脈依存度(context dependency)が高いコミュニケーションの場である。それに対して、学術論文は、なるべく文脈に依存しないで、意味を直接かつ明快に表せなければならない。誰が読んでも（あるいは、その分野の専門家の誰が読んでも）同じように受け止められるし、執筆者が期待した通りに解釈されなければならない。後ほど具体例を出す、明快さを求めて、正しい語彙を選ぶだけでなく、文法も正しく適用する必要がある。

(3) Objectivity 客観性

以上の2点と密接に関係するが、書き手の個人的な感情や価値判断を表す表現を学術論文では使わない。過激な言い回しを避けて、冷静な語調を保つのが学術論文に相応しい。特に、語彙を選ぶときに、その語が価値判断を表す含意があるかどうかには気をつけなければならない。多くの場合に、そのような含意は辞書の定義だけでは十分つかみ

取ることが出来ず、実際の使用例、文脈も見なければならぬ。

(4) Relevance 関係性

論文を執筆した研究者は、自分の論文が他の研究者に読まれ、新しい知識への貢献として認められることを期待している。こうして認められるかどうかは、論文の内容だけでなく、その書き方にもよる。全世界で定期的に出版される学術雑誌に記載される論文の量が非常に多く、その中から自分の論文が注目されるために工夫が必要である。確かに、論文を英語で出した場合、より多くの人の手に届く可能性がある。しかし、実際に読んで、認めてもらうために、人に読む動機を与えなければならない。内容が新しく、注目される現在問題に関係していることを直接示さなければならない。これは論文全体の構成に関わる問題でもあるが、序論(Introduction)が特に重要な役割を果たしている。英語論文の執筆を指導するときに、序論の書き方が中心テーマの一つになる。

この報告では、この4点を全部取り上げることが出来ないが、「語調の硬さ」と「明快さ」を中心に、具体的な間違い例を挙げながら、英語学術論文を執筆する際に注意すべきところを幾つか見ていきたいと思います。

3. 学術スタイル

まず、語調を学術論文に相応しく、硬くする方法を見ていきたいと思います。前節で言及したように、ラテン系の語彙を多く使えばより学術的な語調になる。多くの場合、スタイル的な基準のほかに、ラテン系の語彙の方が意味が狭く、より正確に意味を表現することが出来る。一例として、会話英語で非常に頻繁に使われるgetという動詞が挙げられる。ゲルマン系の動詞の中でも、特に注意が必要なこの語は、文脈によって様々な違う意味を表現することが出来る。例えば：

1. *I got the data for my study from

documents held at the British Library.¹⁾

2. *We got a grant for our research from the JASI Foundation.
3. *When the current was switched on, the electrode got hot.
4. *We would like to get this type of information automatically from large text data.

Getに代用できるラテン系の動詞のなかに、最も多くの文脈に当てはまるのはobtainである。以上の例文の3. 以外は、gotをobtainedに代えることで、ずっと学術論文に相応しくなる。3. の場合には、became (ラテン系ではないが) にするのは最も適切である。しかし、更に考えれば、2. のgotをreceivedに代えることも出来る。そして、4. の意味を更に明確化しようと思えば、obtainよりもgenerateが良いかもしれない(情報を自動的に発生させる方法を探っている研究だと解釈した場合に)。Getに代用できるラテン系の動詞は様々あるが、それぞれのニュアンスが違うから、文脈にあわせる必要がある。いずれにせよ、英語の学術雑誌をよく読めばわかるように、getというゲルマン系動詞は、日常会話での使用が非常に多いのにもかかわらず、学術論文ではほとんど使われていない。

動詞と言えば、日常会話で使われる英語のもう一つの特徴は、動詞と前置詞を組み合わせた「句動詞」(phrasal verbs)である。そのほとんどはゲルマン系の語幹から派生したもので、学術論文ではあまり使用されていない。例えば、

1. *We would like to take out useful statistics from previously existing sources.
2. *I found out that I need to improve my knowledge of contemporary theories of democracy and governance.

学術論文では、1. のtake outをextractにして、2. のfound outをdiscoverにする。つまり、句動詞ではなく、一語のラテン系動詞を使用するのが学術英語の特徴の一つである。これは一部の例に

すぎなく、同様なものが他に沢山ある。

動詞は特に注意を必要とするが、次に動詞ではない一例を取り上げる。Gotと同様に、意味があまりにも幅が広く、学術論文に適していない、もう一つの語はbigである。物理的に大きいことを指す場合に、largeを代用すれば良いが、物事の重大さ、意義深さ、注目度の高さなどを指すときに、major, important, significantなどにした方が適切である。例えば、「大きな理由」をa big reasonと言わず、a major reasonにすればかなり学術的になる。同じく、「大災害」をa big disasterではなく、a major disasterあるいはa serious disasterにする。

今までは、語彙の問題を扱ってきたが、学術英語に文法的な特徴もある。その特徴をここで全部取り上げることが出来ないが、参考文献を読んでいただければ、詳しいことがわかると思う。ここで、今まで私が見てきた日本人が書いた英語論文でよく現れる問題を2点だけ取り上げる。

1. 学術論文では、etceteraやand so onのような「文末開放的な」表現を使わない方が良い。代表的なものを幾つか並べて、「その他に同様なものがある」ということを述べる場合に、その代表的なものは何を代表しているのか明記すれば良いのだ。例えば、私の指導学生の一人が書いた以下の例文、

*In modern democratic societies, intellectuals are expected to discuss social issues in newspaper columns, magazine articles, television shows, and so on.

を以下のように書き直せば、より学術論文に相応しくなる：

→ In modern democratic societies, intellectuals are expected to discuss social issues in newspaper columns, magazine articles, television shows, and other media.

つまり、この学生が取り上げているのは、知識人が発言を出すメディアのことだと解釈することが出来る。その具体例を挙げるのは全く問題ないが、

具体例を包括する範疇とは何か明記した方が学術的である。

2. 周知のように、英語はSVOの言語である。つまり、文の中に、主語(S)・動詞(V)・目的語(O)がそれぞれの決まった位置をもって、語順を変更すれば文の全体的な意味が大きく変わる。しかし、あまり意識されていないのは、副詞の位置を変えることによってどうなるのかである。主語・動詞・目的語と違って、副詞の位置づけは比較的に自由である。しかし、そうだといっても、副詞をどこに入れるのか全く差がない訳ではない。特に注意が必要なのは、文末の副詞である。原則として、副詞を文末に位置づけることが学術的なスタイルに相応しくない。例えば、次のような例文がある。

*I am interested in the relation between the Japanese public sphere and the Japanese entertainment industry, especially talent agencies, now.

これは、ある博士課程の学生が自分はどういうテーマに関心を持っているのかを文章で語っているところである。問題は、最後に位置づけたnowである。この学生が英語で会話していたならば特に問題にしないが、硬い文章なら以下のようにすればよい。

→ I am currently interested in the relation between the Japanese public sphere and the Japanese entertainment industry, with a particular focus on the role of talent agencies.

なるべく副詞を動詞に近い位置を与えるのが学術的なスタイルである。(あと、ゲルマン系のnowより、ラテン系のcurrentlyの方がよい。)特に、助動詞と動詞の間に入れることが多い。(前に言及したスエールズとフィークの言葉を借りれば、副詞を「動詞の中に」入れるのが学術英語の典型的なパターンである。)

*I have conducted a survey on the economic impact of earthquake disasters

recently.

→ I have recently conducted a survey on the economic impact of earthquake disasters.

*The survey was conducted very thoroughly.

→ The survey was very thoroughly conducted.

4. 文章の流れと代名詞の使い方

次のテーマは、英語学術論文に必要な「明快さ」(Clarity)と特に関係が深い。日本人が書いた英語文章によく見られる代名詞の不明確な使い方に焦点を当てたいと思う。文字通りに、代名詞とは、文脈から既に理解されている内容を代理する役目をもっている。そして、当然なことながら、ある代名詞は何を指しているのか、その文脈によって違うのだ。例えば、一回使ったitは、別にもう一回使用したitと必ずしも同じ指示対象をもつ訳ではない。それで、その一回に使ったitは同じ文脈の中で言及されている様々なことのどれを指しているのか読み手に理解されていなければ、文の意味が十分伝わらない。もちろん、書き手自身は、その代名詞を使うことで自分が何を指すつもりなのかわかるはずだが、読み手はそれを理解できるかどうかは問題である。今まで私が見てきた日本人の執筆者による英語文章には、代名詞(ことに、第三人称のit, they/them)の指示対象が不明になっていることが多い。より広い観点から考えると、これは文と文の間の繋がり、文章全体の流れの問題でもある。あることを述べた後、次に述べることとの繋がりを明確にする方法を考える必要がある。

不明確な代名詞の使い方の具体例として、以下の文章を読んでみてほしい。

¹James J. Gibson was one of the first people to challenge the behaviorist stimulus-response model and propose an

alternative approach to the understanding of human behavior. ^{2*}It contains many original ideas and is known as ecological psychology. ^{3*}An important aspect of this approach is the concept of “direct perception”. ^{4*}It means that environmental information is sufficient by itself and need not be processed or complemented, since all animate beings perceive environmental meaning directly.

第1文で言及されていることが様々であり、第2文の主語itはそこから何を指しているのか読み手が確かに理解する方法がない。文章全体を読み返せば、Gibsonが提唱したalternative approachを指すのではないかと推定できるが、英語学術論文ではこの程度の不明瞭は許されていない。第2文を学術論文に相応しくするために以下のように書き直せば良い。

→^{2*}This approach contains many original ideas and is known as ecological psychology.

このような「this＋名詞」のパターンは学術英語ではしばしば使われている。(詳しいことは、スウェイルズ&フィーク『効果的英語論文を書く』26～29頁参照)

ところが、第3文にthis approachを繰り返す必要がなく、itに置き換えても意味が十分伝わる。

→^{3*}One of its important aspects is the concept of “direct perception”.

(論文では、of itではなく、所有格itsを使用するのが多い。)なぜ今回はitで十分明確かといえば、前文の主語を指しているからだ。第三人称代名詞it/theyを主語として使うと、その指示対象が前文の主語であることが常に理解される。言い換えれば、指示対象が前文の主語ではないときに、it/theyを使うのは適切ではないのだ。

第4文の主語はどうすべきだろうか。そもそも、第3文と第4文はどのように繋がっているのか。厳密に言えば、第4文の主語は第3文の主語を指

しているとは考えにくいのだ。とすると、itを主語として適用できる条件が満たされていないと考えざるを得ない。文章の流れを明確にするために、第4文の冒頭の部分を全面的に書き直す必要がある。例えば、

→^{4*}According to this concept, environmental information is sufficient by itself and need not be processed or complemented, since all animate beings perceive environmental meaning directly.

にも出来るし、

→^{4*}This concept expresses the idea that environmental information is sufficient by itself and need not be processed or complemented, since all animate beings perceive environmental meaning directly.

にも出来る。

この第4文のもう一つの可能性は、文頭のitを簡単にthisに置き換えることである。

→^{4*}This means that environmental information is sufficient by itself and need not be processed or complemented, since all animate beings perceive environmental meaning directly.

こうするとあまり明確にはならないが、原文より幾分改善されたと見ることができる。なぜかといえば、thisを使うことにより指示対象の幅が広がるからだ。Itにすると、指示対象が前文の主語に限定されることになるけれど、thisにすれば、それまでの諸々のことを包括的に指す解釈が可能になる。つまり、それまでの文の流れを全体的にピックアップした上で、「更にこう述べる」ということが出来る。

このように、thisを主語として、単独(つまり、後ろに名詞をつけない)で使用した場合に、指示対象が限定された何かを指すのではなく、前文の全体的な意味を取りまとめることが多い。その具体例として、次の文章を読んでみよう。

¹In recent years, the number of applicants

to PhD programs has increased steadily.

²This is partly caused by the rising demand for highly skilled workers in the high-technology information economy.

³Furthermore, it could also be attributed to cultural changes that put greater emphasis on education as a means of achieving personal fulfillment and psychological wellbeing.

この文章の第2文の主語thisは、前文で述べられたこと（つまり、博士課程への出願者の数が近年増えたこと）を丸ごと指している。前文の主語のみ（つまり、博士課程への出願者の数）は指していない。仮に、書き手が第2文の主語をitにしたとすれば、意味が理解されないか、読み手に違和感を与えてしまうかもしれない。しかし、第3文の主語は、第2文の主語thisを明らかに指しているから、今度はitにしても全く問題ない。指している内容（つまり、博士課程への出願者の数が近年増えたこと）は一緒だけれど、第2文で一度thisを使ったので、第3文以降はitで指すことが出来る。

以上の話は、やや複雑に見えるかもしれないが以下の2点を覚えておけば、代名詞の使い方がより学術論文に相応しくなるだろう。

(1) It/theyは明確で限定された指示対象をもたなければならない。そして、主語として使用した場合に、前文の主語を指していると理解される。

(2) 指示対象が明確で限定されていないか、前文の主語に当たらないときに、it/theyを主語として使わない。この場合に、this/theseを使わなければならない。指示対象を更に明確化するために、this/theseの後ろに名詞を付け加えることが多い。

ここまで、主語を中心に、学術論文における代名詞の使い方を明らかにしようとしてきた。もちろん、代名詞は主語だけではなく、直接目的語や前置詞の補語として使用することもある。ここで

詳しく説明する余裕がないが、以下の間違った用例を通して、主語以外の代名詞に関する注意点を指摘しておく。

1. *My research concerns the expertise process in practitioners of workshops and designing a learning environment for them
2. *This paper illustrates the ICT environment of foreign residents in Japan, particularly international students, and their use of it.

この2つの例文は、とくに文法的な問題はなく、意味がある程度理解できる。しかし、学術論文の理想とされる明快さを欠いている点で問題がある。特に、下線をつけた代名詞の使い方は避けるべきである。より学術論文らしくするためには、以下のように書き直せばよいだろう。

1. →My research concerns the expertise process of workshop practitioners and how to design a learning environment to foster such expertise among trainee practitioners.
2. →This paper sheds light on the ICT environment of foreign residents in Japan, particularly international students, and investigates how these residents make use of their ICT environment.

このようにすると、意味がすぐ理解され、読み手に不快感を与えることはない。

5. 学術論文における冠詞の使い方

論文を読みづらく、不明快にしまうもう一つの問題は冠詞の誤用である。

ここで冠詞の正しい用法を全面的に解くことが出来ないが、例文を見ながら、定冠詞のみに関する幾つかの注意点を指摘する。

広くいえば、定冠詞に2つの使い方がある。まず、一部の名詞が特定のものではなく、一般概念として捉えた場合に、定冠詞をつけることがある。

「抽象的な総称」と呼ばれるこの定冠詞の用法は、特殊なケースとしてここで取り上げない。(詳しい説明は、スウェイルズ&フィーク『効果的英語論文を書く』228～231頁にある。)

定冠詞のより一般的な使い方は、指示対象が限定されている「特定名詞」である。つまり、その名詞が指すことの出来るあらゆるものではなく、ある特定のものが指示対象になっている。多くの場合に、書き手がその名詞に修飾をつけることで限定されていることがはっきりする。例えば、

This paper investigates the relation between a firm's advertising expenditure and its stock value.

Relationとは、かなり一般的な概念である。様々のものの間に「関係」が存在している。しかし、ここで取り上げられているのは、relationという一般的な概念ではなく、ある特定のものの間に存在する関係である。ただ、それだけではない。次の例文を見れば、定冠詞のもう一面が見えてくる。

This paper investigates a relation between a firm's advertising expenditure and its stock value.

このようにrelationに不定冠詞をつけることによって、意味が変わる。今度は、広告関連費用と企業価格の関係性を全面的に取り上げるのではなく、その関係性の一面だけが研究対象として挙げられている。つまり、広告関連費用と企業価格の間に複数のrelationsがあると想定され、「ここでその中の1つだけを取り上げる」という意味で捉えられる。というのは、定冠詞を名詞につけるときに、その名詞が単に修飾がついて限定されているだけではなく、むしろ、同じ名前(=名詞)で知られ、なおかつ同様に限定できるものは他にないという前提がある。

定冠詞がついた名詞に修飾がついていない場合に、その限定性が暗黙に理解されていることになる。つまり、書き手と読み手の間に何かの共通理解が成立しており、直接限定しなくても、その名詞がある特定のものを指していると理解できる。

問題は、その共通理解をどうやって成立させることが出来るのかである。同じ文章の中でその名詞を既に一回使ったことがあるだけでは、多くの場合に、その共通理解を成立させる条件として不十分である。前の例文の続きはもともと以下のようになっていた。

This paper investigates the relation between a firm's advertising expenditure and its stock value. *The authors empirically assess the relation based on Japanese firms' recent statistical data.

このままでも意味が通じるけれど、学術文章に最も相応しい書き方にはなっていない。前章で説明した通りに、前文で言及した(前文の主語以外の)ものを「this+名詞」で指すことが学術論文の一般的なパターンである。特に、前文で修飾がついていたものは、修飾とともに繰り返す必要がなく、「this+名詞」のみで十分理解される。ただ、thisをtheに置き換えると、別のもの(つまり、前文で言及したもの以外のもの)を指している可能性を排除できないから、thisと比べて意味が不明瞭になる。

→This paper investigates the relation between a firm's advertising expenditure and its stock value. The authors empirically assess this relation based on Japanese firms' recent statistical data.

以上のことをおさらいすれば、定冠詞を使う必須条件は2つあるといえる。

- (1) その名詞の指示対象は、修飾で限定されているものか、書き手と読み手の共通理解で限定されているものとして理解できる。
- (2) その名詞が指すことが出来る、同様に限定されているものが存在しない(あるいは、その存在は執筆者が想定していない)。

この条件は、2つとも満たされていなければ、定冠詞を使わない。(2)のみが満たされた場合は、定冠詞を使う条件として十分だと主張できるかもしれないが、(1)のみは明らかに不十分である。

なお、先ほど言及した「抽象的な総称」は、この2つの条件と関係していない別枠として考えればよい。

この2つの条件が満たされていないときに定冠詞を使用すれば、文章の意味が誤解されるか、奇異に思われる。これに関して、以下の例文を読んでみよう。

¹Fluorine mouth rinse is widely promoted as the main means of preventing tooth decay among preschool and elementary school children. ²However, no adequate information has been provided about its side effects and demerits. ³*This situation raises the questions about the performance of informed consent. ⁴*One of the reasons for this is that the organization that consists of the specialists from the Ministry of Health and Society for Dental Health is promoting the fluorine mouth rinse as part of the public health policy. ⁵*This policy is in contradiction with the view of Medwatchers Japan (a body that investigates potential cases of harmful drug effects) which expresses the concern about the side effects of the fluorine mouth rinse. ここでは詳しく分析する余裕がないが、下線がついた定冠詞は全部不要である。この文章で取り上げられているフッ素洗口は一貫して「フッ素洗口そのもの」である。特定の商品名、種類、ある時にある人が使ったもの、ある瓶から出ていたものなど、限定的な記述はどこにもない。このような条件では、その名詞を何度繰り返しても、定冠詞をつけない。第3文のquestionsも、第5文のconcernsも、疑問の具体的な内容はこの段階では特定されていないから、定冠詞をつけるのは奇異である。そして、第4文のspecialistsは、言及された省庁と学会に所属する専門家の全員を指しているかどうか判断しにくいから、上述した第2条件は十分満たされているとは考えられない。

(むしろ、その省庁と学会に所属している専門家の全員がフッ素線口の使用を促進している組織に入っていることが推定できる情報がこの文章の中に含まれていない。更に、「専門家」という語を限定的に使用できる条件もはっきりしないから、「専門家」と呼び得る者が他にいる可能性が常にある。)

6. 最後に

この報告は、学術スタイル、代名詞、冠詞、3つの問題群を中心に学術英語の特徴をはっきりさせた上で、英語論文を執筆するために具体的な工夫を教示することを目的としている。ここで取り上げられなかった「客観性」や「関係性」については、別の機会で論じたいと思う。特に、「関係性」を確立するために重要な「序論」を執筆する戦略は、チュートリアルの最後に少し話すことが出来たが、この報告から省略せざるを得ない。(詳細について、ジョン・スウエイズ／クリSTEIN・フィーク『効果的英語論文を書く』172～193頁を参考にされたい。) 今回のチュートリアルを振り替えて何よりも印象深いのは、(1) 英語で論文を発信する意欲をもつ研究者が大勢いることと、(2) 学術英語を大学院のカリキュラムに組み入れることの必要性である。一回限りのチュートリアルでも意義があるかもしれないが、本当に必要なのは英語発信力を充実化するための教育体制である。それを抜きに学術の国際化に対する意欲とそれを実現するための能力の間に開いているギャップが埋まらないだろう。

注

1) 頭に*をつけた例文は、学術英語の基準で「適切ではない」、「間違いが含まれている」とこの執筆者が判断した。なお、その文の中の問題箇所を下線をつけた。

参考文献

小田麻里子・味園真紀 (1999) 『英語論文すぐに使える

表現集』ベレ出版

Oshima, Alice & Hogue, Ann (1991) *Writing Academic English*. Second Edition. Longman.

Swales, John M. & Feak, Christine B. (2004) *Academic Writing for Graduate Students*. Second Edition. University of Michigan Press.

スウエイルズ、ジョン・フィーク、クリスティン

(1998)『効果的な英語論文を書く』大修館書店

上村妙子・大井恭子 (2004)『英語論文・レポートの書き方』研究社